

氏 名 ^{ポベスク} ^{フロリン} POPESCU Florin
 学位の種類 博士 (文 学)
 学位記番号 文 博 第 258 号
 学位授与の日付 平成 15 年 7 月 23 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 研究科・専攻 文学研究科文献文化学専攻
 学位論文題目 キリシタン写本「講義要綱」の国語学的研究

論文調査委員 ^(主 査)
 教授 木田章義 教授 大谷雅夫 助教授 大槻 信

論 文 内 容 の 要 旨

16世紀末、イエズス会の会士が編纂した「講義要綱」と呼ばれる資料がある。ラテン文で記されたものと日本語で記されたものがある（以下それぞれ「ラテン語本」、「日本語本」と呼ぶ）。本論文では、現存のラテン語本と日本語本の表記を考察し、更に日本語本に用いられている「本語」を分析することによって、両者がどのような関係にあり、どのような経過を経て編纂されたのかという点を明らかにした。「本語」というのは、例えば anima（靈魂）を「アニマ」「阿爾摩」のように、原典の欧文の語句を、日本語に翻訳せずに、そのままの語形を片仮名や漢字などで表記して用いているものを言い、固有名詞なども、「本語」に入る。

「本語」は、ローマ字で表記された「ローマ字本語」、片仮名で表記された「仮名本語」、漢字で表記された「漢字本語」、特殊な合字で表記された「合字本語」の四種に分かれる。漢字と仮名、ローマ字と仮名、合字と仮名で表記されたものもある。

第1編において、ラテン語本と日本語本の構成を比較し、ラテン語本の第一編に相当する部分と、第三編の末尾、つまり日本語本の初めの一編と終わりの数節が欠けているのではあるが、現在比較できる範囲では、内容や構成はほぼ一致していることを明らかにした。興味深いのは、日本語本には第二編の終わりに「アニマラショナルノ正体ハ不滅ナリト云事」という編があるが、この部分はラテン語本にはない。それは、ヨーロッパではアニマ（靈魂）の不滅ということは自明のことであり、敢えて論証する必要がない程度のものであるが、靈魂が不滅であるという基礎的な部分から教義書に含めなければならなかったという点が、日本語本が日本人向けの神学書であることを示している。

日本語本のローマ字表記と原典のラテン語本とを比較することによって、日本語本のローマ字には、l と r の混同のような、日本人でなければ生じない誤記があることから、日本人の手になるものと判断できる。そして、ラテン語本のローマ字の字体、日本語本のローマ字の字体と和文の字体を分析し、それぞれ元の原稿を丁寧に書写したものであって、現存本は原本ではなく、ラテン語版は1594年以降に成立した写本で、現存の日本語版は1595年以降成立した本であるらしいと結論した。

日本語本の和文の筆跡も、右上がりの文字と右下がりの文字とがあり、いくつかに分かれるように見えるが、その字体の交代する様子を見ると、右上がりから右下がりは徐々に生じており、数丁を経てようやく全体が右下がり字体に移行する。右下がりから右上がりへの変化は、突然に起こり、しかも章や節の区切りの部分でなく、文章の途中から変わって行く。また、漢字の字体を比べてみるとほとんど同じ字体が表れるので、これは同一人物の書き癖であって、日本語本の和文は一人の人物によって書かれていると見るべきであろう。

日本語本の中のローマ字文（ラテン語の引用文や本語のこと）は、和文を書いて行くときに、ローマ字文の部分は空白のままおいておき、あとでローマ字文を書き加えていったらしい。というのは、多くの箇所、書き込む場所が少なく、詰めて書かれてあったり、横にはみ出していたりしているのである。一方で、ローマ字文の後にまだ空白が残っている場合も多く、空白がまったく埋められず、空白のまま置かれている所も少なくない。明らかに、あらかじめ和文の間に空白を残し

ておき、あとで書き込んだことが分かるのである。ということは、和文を書いた人物とローマ字文を書いた人物とは違っていたと考えるべきである。そこで、ローマ字文の筆跡を検討して、それには2～3種類（イ、ロ、ハ）があることを指摘した。イの筆跡はもっとも多く出てきて、文字が大きく、筆使いが稚拙であり、文字が繋がっていないことがある。ロの筆跡は、文字が小さく比較的整っており、文字も繋がっており、当時のヨーロッパ文献と同じような省略表現を用いることから、ヨーロッパ人のものではないかと考えた。

しかし、ローマ字文は、書き誤りが多く、その書き誤る傾向については、イもロも同じである。例えば、単語の区切り間違い（一語を二語に分けてしまったり、二語を一語のよに繋いでしまう）やiの上の点の位置がとんでもないところにずれるだけでなく、点が書かれていないもの、筆写体のaの上部が少し離れた形で書かれることがあるが、それをe iやuと見間違っているものなど、簡単な基本的な単語についても、このような例が見られるので、一見したところ、イとロは字体が異なっているように見えるが、その中に表れる特徴は一致し、一人の手になるものとも考え得る。この筆写者は、ヨーロッパの言葉に関して、知識が低く、ローマ字文の内容については、ほとんど理解せぬまま転写していったようである。

和文の中の「合字」（後述）の書き方を見ると、あるいは、和文もローマ字文も同一の人物が一人で写していったものである可能性もある。

第2編では「ローマ字本語」について考察した。ローマ字書き本語は580種（延べ759例）である。和文は縦書きであるが、ローマ字書き本語は90度回転させて読むように書かれている。

ローマ字本語の原形となった言葉を見ると、約44%がラテン語形を写しており、ポルトガル語形は23%、ラテン語・ポルトガル語同形のもの12%ほどである（その他20%）。日本語本の元となったのがラテン語本であるから、すべてラテン語形をもとにするのが自然であるが、ラテン語・ポルトガル語同形を含めても、ラテン語によるものは56%で、ようやく半数に達する程度である。その他の中にはラテン語形ともポルトガル語形とも違った、風変わりなものも含まれているが、これらは多くの場合、ラテン語の語形をもとに、語尾をポルトガル風に変えたものと見られ、「本語」をポルトガル語で表記するかなり強い傾向が、背景にあったようである。一部はスペイン語と一致する例があり、翻訳者のペロ・ラモンがスペイン人であったことと関係があるかもしれない。あるいは、現存版のもととなった原本の筆記にはスペイン人も関わったのではないかと考えた。

第3編では仮名書き本語について分析した。「仮名本語」は2201種、延べ14643例ある。仮名本語と原典とを比べて行くと、ラテン語形を元にするものは、異なり語で7%程度、ポルトガル語形をもととするのが約60%、ラテン語・ポルトガル語共通形に当たるものが18%程度になる（その他約15%）。ここではポルトガル語形を元とするものが多く、ラテン語・ポルトガル語共通形や、その他の中の、ラテン語幹にポルトガル風の語尾のものを入れると、もっとポルトガル語の比率が高まる。

仮名本語は、書き誤りがかなり多く、ラテン語本と対照しないと、どういう語を写そうとしているのかが分からないものもあり、誤字・脱字・衍字も多い。これらの誤写を除いた仮名表記の系統的な特徴（変化と揺れ）を検討した。これらの現象については、第3編の後半部と第4編にわたって考察したが、これらは現存版の書写者の誤写によるものでなく、原本の成立の際の問題であることを前提とした。系統づけられる表記の揺れを調査すると、格・性・数に応じた語形変化を反映するものがあるが、これはラテン系言語の特徴であるから、当然のことである。イ列とエ列、オ列とウ列の混乱があるが、これも当時のヨーロッパの俗文書にはよく見られる現象であり、必ずしも本語表記の際の誤りとは言えず、際だった現象はない。ただ、仮名本語では、濁点・半濁点を使って、清濁をかき分けようとしていたり、ワ行に濁点を付けて、va, vuを表示しようとしていたりしている。さらに、仮名本語が長音表記しているものを調べると、長音表記はすべて言語のアクセント音節に当たることが分かった。神学用語の減多に使用しないようなポルトガル語のアクセントを、日本人が知っていたとは考えにくく、和文で翻訳してゆくときに、ヨーロッパ人宣教師が原語を声に出して読んでみせたことを示唆している。

第4編では、第3編で論じた仮名本語の、原語の綴りについて、名詞、形容詞、副詞、動詞に分け、更に細かく分析した。基本形以外の形が残っているのはラテン語の形の語に限られている。またこれらのラテン語の形は、ラテン語版に出てくる文法形をそのまま表記している場合が多いが、出現例数が少なく、多くの場合に一カ所にしか出ておらず、和訳が付されていることが多い。また、場合によってローマ字で表記されることもあり、これらのラテン語の形の仮名本語は、聖書などのローマ字表記の引用文に近い扱い方をされていることを指摘した。

また、ラテン語の連続子音は前の子音が脱落する例が多いが、ラテン語の発音を完全に仮名で表記する例もある。ヨーロッパ人は子音連続のラテン語形の発音を提供したが、筆記者がこれらを正確に聞きとれないまま表記したと考えられる。ce, ci, tioなどの語尾に関しては、この表記がポルトガル語風、もしくはスペイン語風になっている原因は、筆記者の方針に帰するものではなく、ヨーロッパ人が提供した形を写しているのではないかと考えた。また、翻訳者のラモン師は修練長でラテン語を教えていたことから、本語の形を筆記者に提供したのはラモン師ではないだろうと判断した。

第5編では「合字本語」の分析を行った。合字とは、イエスキリストのように頻繁に出てくる重要な概念を、XとPを合成した一字相当の符号で表したものをいう(XPは本来ギリシア文字によるキリスト(χριστο)の初めの二文字を取ったものである)。

合字本語は18種類の概念に対して用いられ、形が少し異なったものを入れて、23種類の合字がある。その延べ用例数は3625例に達し、一つの合字が頻繁に使用されていることが分かる。合字はローマ字本語と違って、和文の中で、漢字と同じように縦書きで読めるように書いてある。合字の作り方は、ポルトガル語の語頭(時には語中)の1~2文字と語末の1~2文字が合成されることが多い(filhoの語頭のfと語末のoを合成してfoとなる)。日本語版の合字の半分程は、ラテン語版に出てくるものと形が異なっている。日本語版では合字の表記の揺れ、誤記はほとんど存在しない。他のキリシタン資料では、原語資料でも、ローマ字資料でも、日本語資料でも省略表記は通常の仮名や漢字で書かれる完全な表記と混在している。合字で表されている概念に対して表記の揺れがないのは、国字の写本だけであり、形も酷似していることなどの事実を指摘した。そして1580年代から1612年の間の資料を見ても、合字の形や種類があまり変わらないことから、合字を使用する習慣は1580年代以前に、ローマ字資料の省略表記を元にして発生し、すでに定着していたと推定した。

第6編では漢字本語の調査を行った。漢字本語は「悟朗利阿(グロウリア)」、「前痴与(ゼンチョ)」など24種類、延べ1233例ある。漢字二文字の場合には省略はされることはないが、三文字以上になると、「悟--」、「悟朗--」のような省略形が存在する。合字は他の表記が無いのに対して、漢字本語では仮名書きやローマ字書きのものも存在する。

当時の他の資料から漢字本語を探しだし、対照してみると、国字版本には出てこず、写本の教義書と書簡にしか出現しないが、もっとも形と種類が似ているのは、1580年代の教義書であるということが分かった。ただし、時代が下るにつれ、原語の発音と乖離が激しくなり、江戸時代中期の資料になると、元の形が分からないまでに変形し、すでに地名か人名かさえ混乱するほどになっている。

漢字の選択には、異教徒に対して「前痴与」、理性・分別に対して「縁天治面度」、エジプトに対して「恵実土」など、価値観を伴った選択をしている。ただし、全例がそのように説明できるわけではない。

漢字本語はある部分に固まっていることが多く、神学用語の羅志与那留(ラショナル)、縁天治面度、阿爾摩のような、一部のものだけが全編に使用されているが、表記法は漢字だけでなく、仮名のものも多い。

漢字本語の大部分が、旧約聖書、福音書にでてくる語である。漢字は画数が多くて面倒である上に、仮名本語に見られたアクセント音節を長音で表示することも難しいのに、取って漢字表記をとっていることは、特にこの表記を意識していたことを示している。単に丁寧な書き方をしただけでなく、あるいは国字で書かれた聖書などがあった可能性もあり得る。

原本の成立について総括すると、和訳はペロ・ラモン師一人によるだろう。筆記作業に関しては、日本人の筆記者と、筆記者に本語の発音を提供したヨーロッパ人が関わったと考えられる。ローマ字本語にスペイン語で書かれた数例があることから、このヨーロッパ人がスペイン人であった可能性がある。ラテン語をポルトガル語風、あるいはスペイン語風に変えることに対して、ラテン語の先生でもあったペロ・ラモン師が同意していたなら、おそらくすべての形ポルトガル風かスペイン語風に統一されたことが予想される。実際そのようなになっていないのは、和訳を筆記者に伝えたのはラモン師でないからに違いない。和訳の文章は、別人の口をもって伝えられたことになる。発音を提供された筆記者は本語をどう表記するかを、かなり自由に決めることができたようである。表記法によって親しみの度合いが違うものの、ヨーロッパ人の書物に用いられた用語を模倣して鵜呑みにしたものではなく、日本人によって反芻された形になっているのである。

論文審査の結果の要旨

16世紀末にイエズス会の会士が編纂した『講義要綱』と呼ばれる資料が、近年ヴァチカン図書館で発見された。キリシタ

ンの学林でどのような講義が行われ、どのような言葉を使っていたのかなど、当時のキリシタン文化を明らかにする上で、極めて貴重な資料であるが、まだ紹介程度しかなされていない。本書を正確に分析するには、日本語は勿論、ラテン語、ポルトガル語、スペイン語の詳細な知識を必要とする。恐らく本論文のような分析を行えるのは、現在、この著者だけであろう。

『講義要綱』は、ラテン語で記されたものと日本語で記されたものがある。本論文で、扱うのは「本語」と呼ばれる一群の語彙である。「本語」というのは、例えばanima（靈魂）を「アニマ」「阿爾摩」のように、原典の欧文の語句を和訳せずに、そのまま片仮名や漢字などで表記して用いているものを言う。「本語」そのものは日本語ではないので、これまであまり注目されて来なかった。著者は、ラテン語、ポルトガル語を母語同然に使えるために、その本語のもとの言葉が、ラテン語なのか、ポルトガル語なのか、ポルトガル風のラテン語なのか、スペイン語なのかの判断ができる。この一点ですでに、日本人研究者より数段すぐれた分析が可能になる。

「本語」は、ローマ字で表記された「ローマ字本語」、片仮名で表記された「仮名本語」、漢字で表記された「漢字本語」、特殊な合字で表記された「合字本語」の四種に分かれる（一部、漢字と仮名などの混交表記がある）。著者の分析によれば、ローマ字本語は半数近くがラテン語形によるが、ポルトガル語形によるものも23%ある。ラテン語文を原典としているのに、ラテン語によるものが44%しかない。仮名本語になると、ラテン語形が7%、ポルトガル語形が60%となる。ラテン語・ポルトガル語同形の場合は、ラテン語形にもポルトガル語形にも数えられるが、どちらに数えるかは決められない。ここまでは両言語に詳しい日本人にも分析は可能である。問題は、20%程度の「その他」に分類された、ラテン語形ともポルトガル語形とも一致しない例である。著者の分析では、これらの多くは、語幹がラテン語形で、語尾がポルトガル語風になっている。つまり、ラテン語形に拠りながら、それをポルトガル語文法形式に変えようとしたために、ラテン語資料にもポルトガル語資料にも表れない語形になっていることを論証した。「その他」の分析が出来たことによって、一気に、本語全体がポルトガル語に拠ろうとする強い傾向にあったことが確実となるのである。これは表記法の違いにかかわらず一貫した傾向である。ラテン語の神学用語さえ、ラテン語をポルトガル語式に用いようとしていたらしく、16世紀イエズス会における、ラテン語の実際の使用状況を明らかにする注目すべき発見である。

本論文の優れた特徴の二つ目は、分析が精緻であることである。ローマ字本語580語（延べ759例）、仮名本語2,201語（延べ14,643例）、合字本語20語（延べ3,637例）、漢字本語24語（延べ1,233例）、合計、異なり語数2,825語（延べ20,272例）の用例を、丁寧に一つ一つ語形を分析し、その当時のポルトガル語、スペイン語、ラテン語を調査し、対照し、その上で考察を始めている。想像するだけでうんざりする作業である。この作業を着実にやり、数々の新しい発見をしている。たとえば、仮名本語の長音表記が、ポルトガル語のアクセントのある音節に対応していることを明らかにした。これらの本語は神学用語であったり、高度な哲学用語であったり、恐らくポルトガル語に堪能な日本人でも、長音表記とアクセントを対応させることはできなかったはずであり、本語をヨーロッパ人が発音して見せて、それを日本人が書きとるという過程を考えなければ、説明できないとする。卓説である。

日本語本で用いられる合字本語（XとPを合成した一字相当の符号でキリストを表したものなど）は、頻繁に出てくる重要な概念に対して用い、仮名やローマ字などの他の表記をとらないこと、当時の文献では、ほとんど形や種類が決まっておらず、少なくとも、1580年以前に、この合字を用いる習慣が定着していたこと、この合字はもともとはローマ字文の省略表記から発生したものであり、一部は欧文の中でも用いられていたが、それよりも種類が多く、日本で工夫された合字も多いらしいことなどを明らかにした。漢字本語については、多くが旧約聖書、福音書の語に用いられ、使用される箇所が一部分に偏ること、これらの漢字本語は、版本には表れず、国字の写本に共通することなどを明らかにした。全ての調査結果が、新しい事実を指摘しており、しかも大きな問題を解決する糸口を提供している。

以上のように本論文はまことに得難い人材とテーマが結びついた、新しい研究である。ただし外国人であるため、日本語の表現にやや整わないところが散見されること、説明不足になりがちなことなどの問題がないわけではないが、本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2003年6月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。